

■ 花葉会賞受賞者紹介

北タイで園芸の普及と発展に貢献する

チェンマイ・セトコンフローラ代表 齊藤正二氏

経歴 (さいとう・まさじ)

昭和 16 年 10 月 1 日生まれ

昭和 39 年 千葉大学園芸学部園芸学科卒業

昭和 40 年 京都大学大学院修了

オレゴン農機・Hakoneya 入社

農機具球根苗木輸出入に従事

昭和 44 年 正和園芸設立 切花生産

後に鉢花、球根生産へシフト

昭和 52 年 輸入業務開始 グロリオサ、アルストロメリア、

サンダーソニア、クルクマなどを導入普及に努める

平成 元年 有限会社正和園芸設立

平成 1 年 タイ等、海外で生産開始

平成 3 年 チェンマイで会社 (CSC) 設立

平成 5 年 タイ・メータ現在地で農場開設

平成 8 年 サンカンベン農場開設

平成 12 年 現在地に第 2 農場開設現在に至る

平成 18 年 チェンマイ国際園芸博覧会に出展協力

平成 19 年 チェンマイ・セトコンフローラ (CSF) 設立

タイ滞在を決断

平成 20 年 切花輸出開始



2006 年当時の齊藤氏農園

2006 年 (平成 18 年)、タイチェンマイでタイ国王戴冠 40 周年を記念して、A1 クラスの国際園芸博覧会が開催されましたが、花葉会海外園芸事情調査団として、会員 20 名が 11 月 9 日から 11 月 15 日までタイを訪問し、齊藤さん自身から園芸博覧会会場をご案内いただきました。

また農園を訪問し、農園内にある高床式のバナナの葉を葺いた三角屋根の少数民族カレン族の住居に分散して宿泊し、農場で働く従業員らに少数民族の舞踊や民族楽器の演奏で、歓迎会を催していただきましたこと、今でもいい思い出として、脳裡に焼き付いております。

齊藤氏が、経営運営する農場は、チェンマイ市南東部の Mea Tha に位置しており、標高 400m の国有林にあり、35 町歩で花卉栽培をおこなっております。ここで生産されている代表的な球根植物として、クルクマ (*Curcuma*) 属があり、世界にクルクマを広めたのはこの農場からです。

日本では、ミニクルクマが出回っておりますが、この農場では、ピンクや紫、緑や白といった多種多様なクルクマが栽培されており、他にもショウガ科の植物

やラン栽培を行い、積極的な交配育種にも取り組んでおります。

齊藤氏は、自らの農場での球根生産に加えて、タイ北部にあるケシ栽培地域における代替換金作物としての球根生産も指導されております。

また、日本の大学や諸外国からの研修生も多く受け入れており、タイの文化の紹介や農業技術の指導にも熱心に取り組んでおられます。

(文筆：鈴木邦彦)

■ 花葉会賞受賞者紹介

九州の鉢植え園芸植物の生産発展を願って

杉村素生氏

杉村素生氏略歴

1942年 ミクロネシア・ボナベ島生まれ、東京育ち
1965年(昭和40年) 3月千葉大学園芸学部総合農学科を卒業、
日本観葉植物株式会社・東京支社入社
1967年(昭和42年) 日本観葉植物株式会社名古屋本社に転勤
1968年(昭和43年) 日観九州営業所場開設に伴い営業課長として福岡に赴任
1975年(昭和50年) 九州日観植物株式会社として独立
1990年(平成2年) 九州日観植物株式会社専務取締役
2004年(平成16年) 九州日観植物株式会社退職
現在 クリスマスローズの生産育種に従事

杉村素生氏の植物の流通業界での活躍は、1964年(昭和39年)の東京オリンピックを節目として、日本の園芸業界が大きく発展した時代と重なっている。

1965年から1970年の5年間で主要な都市での鉢物園芸市場が整備され、その後の5年間で全国に広がり、この時代に、全国の鉢物植物の流通基盤は出来上がったように思う。

当時の九州における流通状況は、春や秋に開かれる園芸市や1～2月にかけて各地域で連続して開かれていた初市などが主力で、一部種苗店が店頭での鉢物販売を始めた状況であった。



市場で活躍する後輩とともに。左から長岡求氏(FAJ)、杉村素生氏、福永哲也氏(豊明花き)。総会後の懇親会にて

70年代になると、73年の狂乱物価に象徴されるように急速な経済発展に伴い、農業分野でも、ビニールの普及とともに大型の生産施設が次々に誕生して、花鉢物の生産も飛躍的に拡大した。

日本観葉植物株式会社・九州営業所の開設は時代が要求したものとは言え、生産地域としての九州にとっては流通の拠点が出来て、その後、九州日観への飛躍につながり生産拡大の礎となった事を思うと、当時の経営者や杉村氏を含む職員に敬意を表したい。

杉村氏はまさしくこの時代に、生産者と流通業者を結ぶ場で活躍してこられました。

特筆すべきは35年の永きにわたって、せり人として現場に立って、九州の園芸界を牽引してこられたことが生産者の信頼を獲得し影響を広げた最大の功績につながるものだと思います。

杉村氏は、園芸学部での専攻は農業気象学です。どちらかといえば花の専門家ではなかったはずですし、同時代を過ごした私の印象では、学部では空手部を作り、事あるごとに演武を披露していた「空手着姿」だけしか印象にありません。

しかしこの空手部員、今、思うとすごい連中ばかりでした。本山直樹名誉教授、古在元学長などなど、コーディネーターとしての才能躍如です。

千葉大園芸学部出の「せり人」となれば、花の専門中の専門で、花のことならばなんでも、知っているはず、この「カミシモ」は杉村氏に否応なく花の専門家への努力を必要とさせたのでしょうか。杉村氏は生産者が一番大事で、当然のことながら生産の拡大が市場の拡大につながる原点で、生産者への商品開発の情報や新商品の紹介など、ニーズにあった商品生産のあり方を、しっかり発信してこられました。

花の生産者には、本当に花好きで生産規模は小さいが本当に良品を生産する人や企業として花生産を目指して規模拡大を図る人など、千差万別ですが、これらの人をしっかりコーディネートして、九州の鉢物生産を大きく飛躍する原動力になられました。

(文責：五嶋映司)

■ 花葉会賞受賞者紹介

デンドロビウムの国際的な経営を実践する

浅井 信之 氏

浅井信之氏事績

- 1944年 東海市太田町にて生まれる
- 1967年 千葉大学園芸学部園芸学科卒業後、父の経営する大桂園（観葉植物、洋ラン栽培）に参加
- 1970年 千代美さんと結婚
- 1972年 本農場から15km離れた知多郡東浦町に総面積10,000㎡、施設面積1,980㎡の新農場を開設。洋ランの *Dendrobium nobile* 系の栽培と育種に取り組む。
- 1967年より、研修生を毎年1～3名位を受け入れ、後継者の育成にも努力。
- 1980年4月 当時最も人気の高かった *Dendrobium 'Yukidaruma King'* を生産。誰も成し得なかった30cm鉢にバルブ数10本以上、草丈100cmにも及ぶ大鉢を栽培。
- 1984年12月 (社)日本花き生産協会開催の全国洋蘭品評会に10鉢を出品し、見事農林水産大臣賞に輝いた。
- 一方、育種は同じ *Dendrobium nobile* タイプをもとに、小型で家庭でも簡単に栽培が楽しめる方向を模索。日本のセッコク系とインド原産のユニカム種との交配により、3～3.5号鉢、草丈15～20cm、黄金色に咲く 'Chiyomi' とオレンジが鮮やかな 'Firebird' (両品種ともフロリアードで金賞を受賞) を世に問うて人気品種となる。
- 1989年頃から、ブラジル・サンパウロとの季節の反対を利用した *Dendrobium nobile* 系の周年出荷体制を研究。これは日本での夏季の需要が伸びず不成功に終わる。
- 1990年 名古屋で開催され、のち東京ドームでも毎年開催される国際ラン展にも積極的に参加、洋ラン普及に努力。
- 1992年 名古屋国際蘭展へご臨席の高円宮殿下、同妃殿下が東浦町の大桂園農場へご来駕、一代の栄誉を得た。
- 1997年 (社)農業電化協会創立50周年に当たり農林水産大臣賞受賞。
- 日本において、カトレヤの営利生産として初めて電

照栽培を行う。デンドロビウムの冷房施設として、移動ベンチを利用し、昼間は外部に出し、夜間室内に入れて冷房する施設を開発した。これは、現在イチゴの育苗に応用されている。

2003年より、タイ国・チェンマイに依託農場を開設。nobile系の小苗、中苗の栽培に力点を置き、タイ、日本とのリレー栽培に取り組むようになり、低コスト化を図り成果を得ている。

以上、浅井信之氏については年表的な事績を報告しましたが、信之氏のご両親の慶之氏、鈴子氏と親しくご交誼を得ていたのは昭和31～32年頃（1956年頃）からで、信之氏は確か中学生頃であったと思います。ご両親もそうであったように信之氏は性格温厚で、学業も事業も真面目に確実に積み上げていく人です。また事績中にもあるように個人農場で研修生を受け入れることは、奥様の千代美さんが大変お骨折りであったことと存じます。農園事業を推進するのには陰の力として主婦の力は改めて大きいと思います。

今一つ書き加えたいことは、90歳を過ぎた母親を度々タイ国チェンマイの農場へ、或いは欧米の観光地や園芸先進国へ同道していると聞いています。今時珍しい親思いの一面を書き添えることによって、信之氏のお人柄と思っただければ幸いです。

浅井氏の業績は、営農者あるいは育種者、さらには国際的な視点での経営者として、多くの後継者たちへの規範となろうと信じています。

(文責：小笠原左衛門尉亮軒)



オリジナル品種の育成に励む



今も人気の Den.Stardust 'Chiyomi'

洋ランの国際的リレー栽培について

浅井 信之

今日は、僭越ですが、洋ランの国際的リレー栽培についてお話しさせていただきたいと思います。

1966年2月5日、私が生まれました横須賀町の「広報」に、胡蝶蘭を栽培している写真が掲載されました。当時は、観葉植物やほかの洋ランも栽培していました。そのまま胡蝶蘭を栽培していたら私もお金持ちになれたのですが、どう間違ったかノビル系のデンドロビウムの栽培に移ってしまいました。

1) (有)浅井大桂園の経営戦力

a) 育種によるオリジナル品種の育生

今になってみれば目新しいことではないかもしれませんが、20～25年前から育種によってオリジナル品種を作って行こう、国際的に経営し、ブランド化を図って行こうと、目指して準備してきました。

そのブランド品種の一つの‘スターダスト ファイヤード’というデンドロビウムで、母の日をメインに販売しています。

育種による品種の育成は、時間と経費が掛かります。良い遺伝子を持つ系統の親木を持つことと、継続が大事だと思っていますし、それが財産です。デンドロビウムを交配して商品として販売するには、だいたい10年かかります。ですが、毎年やっているとそれが続くというわけです。日本で育種選抜を行いますと経費が掛かりますので、チェンマイで行っています。交配をいろいろやっていますが、なかなか親を超しません。

b) 国際リレー栽培について

海外で農場を開設するにあたって最も重要なのは、お互いの信頼関係だと思います。私は、大体1年の1/3だけチェンマイ。あとは、マネージャーにお金も含めて全部任せています。それには、働いている人も含めて国民性を知ることが必要だと思います。

生育の適地であるということも重要です。当初はバンコクで。乾季の間は生育がよかったのですが、9～10月の雨季になり高温多湿になってノビル系のデンドロビウムは、ほとんど枯れてしまう。これではだめだということで、チェンマイに移ったのです。

次にインフラが整備されているかということです。人件費が安いからといっても、輸送のことも考えなければいけません。

国際的にリレー栽培するうちに感じたことは「投資は予想の倍、利益は予定の半分」と考えていた方がよ

いということです。

c) 商品のブランド化を図る

日頃から自分で、いけばな、フラワーデザイン、絵画、映画、音楽、焼き物などを見て勉強し、感性を磨こうと思っています。商品には物語が必要です。生産者は、品評会に出すのをすごく嫌いますが、そこで賞を取るとその品種や農園が評価されます。今、売る方も苦戦されているので、商品に物語があれば売りやすいのです。そのためにも自分自身の人間性を向上させることが大事だと思っています。

2) リレー栽培の歴史

a) デンファレと胡蝶蘭の場合

リレー栽培といえばデンファレ、胡蝶蘭が主力です。最初はデンファレでした。1980年ごろから試行錯誤が始まり、1990年代にピーク。苗はほとんどがタイです。胡蝶蘭の苗は、1980年代後半から始まり、順調に伸びています。主に台湾からです。中国の胡蝶蘭生産も伸びていますが、中国国内での消費が伸びているので、日本には当分大量には来ないだろうというのが胡蝶蘭の生産者の見方です。

台湾では、1990年代中ごろからアメリカ政府と交渉して2004年よりミズゴケ付きで輸出が可能になりました。これは大変重要なことで、現在一億本くらいフランスコ苗で作っているそうです。アメリカには8255万ドル(約60億円)、日本へは約20億円の苗が日本に来て



台湾の大きなラン生産の温室

います。

写真は今年写した台湾の大きなラン生産の温室ですが、手前で高さ6m、奥のものは8mあり、2階建てになっています。一棟で1500坪あります。台南市は、60万坪の土地を用意して農園を誘致しています。作っているものはミニヤマディが多く、農園に見本を置いて、お客さんに選ばせて増殖して販売します。大輪の白は、ほとんどがSogo Yukidan 'V3'です。強健で花も大きく輪数も乗るといふことで、世界中を席巻しています。

b) 旬浅井大桂園の取り組み

・ブラジルとのリレー試験

1987年に第12回世界蘭会議が、向ヶ丘遊園で開かれました。その時にブラジルの生産者と知り合いになり、翌年ブラジルに行きました。1989年にデンドロビウムのリレー栽培をやってみようと思ひ実験しましたが大失敗でした。ブラジルから日本に送る費用が高額だったのです。

・チェンマイ委託農場の設立

チェンマイの農場は2003年に作りました。ハウスは4棟あり、ハウスの面積は約4000㎡。従業員が9名。農場の女性のマネージャーのイムに経理を含めてすべてを任せています。彼女は、チェンマイの大学の農学部3年生の時、愛媛大学に1年間留学しています。東南アジアでは女性がテキパキと仕事をしているのに感激します。

花作りは水商売！ 水が重要なので心配だったのですが、鉄分が多いのですが何とか出ました。日本から持っていた温風機があるハウスもあります。ビニールで覆って雨に当てないようにし、ある程度温度を保つようにしているハウスもあります。

・デンドロのリレー栽培



チェンマイの農場

最初は、日本へ小さい苗をタイから持ってきて、1年半日本で栽培して花を咲かせて売るつもりで始めましたが、コスト的に大変。今は、開花予定株を8月に日本に持ってきます。1か月後、9月の初旬に芽が出たときに山上げし、10月中旬ごろ山から降ろします。11月に加温、12月に出荷。4か月くらいで出荷しています。

チェンマイから温度がコントロールできるコンテナで、2週間ほどで日本に來ます。究極のデンドロのリレー栽培は、コンテナの中で低温処理をしながら日本に來てすぐに山上げし咲かせる、ということができれば、一番効率がよいかと思ひています。

胡蝶蘭は4～5か月かかります。でも最近では花芽が出たものを送ってきているので、もっと栽培期間が短くて回転が上がっています。

3) リレー栽培のメリット・デメリット

メリットとして生産コスト削減できること、自分の農園での栽培期間が短縮できる、それにより人件費、暖房費がいらぬ。苗室が不要で温室の有効利用ができます。よい苗を送ってもらえば、品質がそろい安定した生産ができます。

デメリットとして、海外の物価の上昇、運転資金がいっぺんに必要になる。胡蝶蘭のように販売の価格がある程度一定に保てるものなら大丈夫ですが、セリで価格が決まるような場合は成り立ちません。胡蝶蘭で破たんする人が多いというのは、売り上げが多くて経費が掛かるためです。ほかに、為替の変動、輸送の傷み、植物検疫（燻蒸によるもので、ノビル系のデンドロビウムは強いので何とか生きています）、苗の生産業者の信頼性、国と国との紛争も挙げられます。また、中国からの脅威というのでも出てきました。

今後のリレー栽培のあり方は、現地へ貢献しなければいけない。人材の育成をしなくてはいけない。日本向けだけでなく海外市場の開拓、育種場としても利用する、ということが挙げられます。

最後に私の好きな言葉で、「年年歳歳 花相似たり 歳歳年年 人同じからず！」「心意気だよ 人生は！」。人生は短いから生きている間は頑張らなくてはいけないと思ひます。ある程度やせ我慢して、心意気で頑張らないといけません。

ぜひ、花葉会が世界の花のメッカであるよう研究をすすめ、人材を育成していただきたいと思ひます。ありがとうございました。